# 徳田和夫氏所蔵『〈名物名代〉餅酒騒動はなし』解題と翻刻

伊藤慎吾

『〈名物名代〉餅酒騒動はなし』は餅酒合戦物の一つである。江戸中～後期の写本として、伝本が一種のみ確認されている。所蔵者徳田和夫氏（本学名誉教授）にお願いし、つぶさに調査させていただいた。またこの度、翻刻のご許可もいただいたので、ここに紹介したい。

【解題】

そもそも異類合戦物とは、人間以外の物同士が軍勢として合戦をするというコンセプトの物語類型である(1)。室町期の『精進魚類物語』『鴉鷺合戦物語』や『十二類絵巻』の後半部分が古くからよく知られている。江戸時代は「精進魚類」と「餅酒」の二種類の対立軸が主流をなし、江戸後期から幕末期にかけては道具類（座敷と台所）の合戦も多様に展開していく。

『餅酒騒動はなし』はその名の示す通り、餅酒合戦物の一つである。ストーリー構成は次の通り。

1　餅と酒とが口論をする。
2　両陣が勢揃えをする。
3　餅には干菓子・水菓子が、酒には生肴・精進肴が加勢する。
4　食物の総大将が仲裁に入り、和睦する。

異類合戦物の構成は類型的であり、本物語もまた、その典型ということができる。では本物語を異類合戦物の中でどのように位置づけることができるか。これについては別稿を準備している(2)。差し当たり、最低限のことを指摘しておくと、本物語に関連するものとして、『太平記餅酒合戦』（吉田屋小吉版）、『膳太平記餅酒噺』（無刊記）、十返舎一九『餅酒大合戦』（大寄噺尻馬のうち）、戯作舎鬼笑『滑稽五穀太平記』等が挙げられる。これらは餅酒合戦物と称すべき物語伝承（あるいは歌舞伎のいわゆる〈世界〉）を共有しつつ、個別に改変して作品化したり、また本文やキャラクターを流用したりして複雑に関連し合っている。その様相は簡略な解題では示しにくいものなので、後稿に譲りたい。

最後に書誌を簡略に記す。

書　型　仮綴
寸　法　たて二四・五cm　よこ一六・三cm
料　紙　楮紙（本文・表紙共）
外　題　名物名代　餅酒騒動はなし（直・左肩・墨書）
内　題　名物名代　餅酒騒動はなし（巻首）
丁　数　一四丁
行　数　毎半葉八行
本　文　漢字平仮名交り文。濁点僅少。
所蔵者　徳田和夫氏

図1　表紙

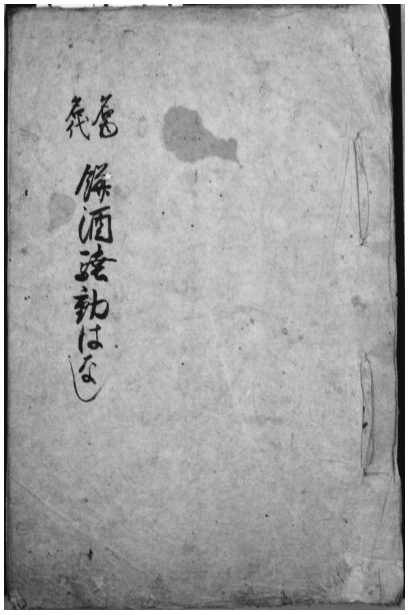
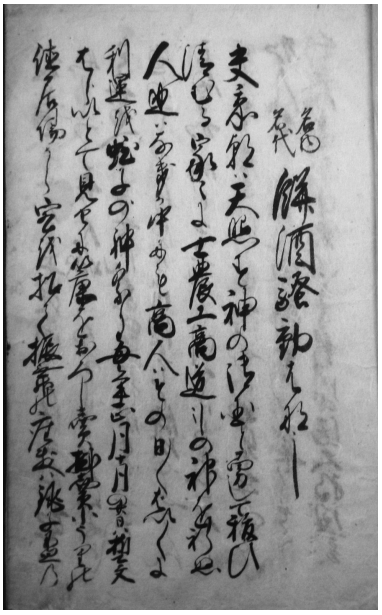


図2　第一丁表



注

（1）伊藤慎吾『擬人化と異類合戦の文芸史』（三弥井書店、二〇一七年）に中世から近代にかけての流れを概観したので参照されたい。

（2）二〇二二年七月一六日、伝承文学研究会東京例会にて口頭報告した。それに基づき、近々公表したい。

【翻刻】

名物
名代餅酒騒動はなし（書外題・左肩）

名物
名代餅酒騒動はなし

夫我朝は天照す神の御国と勇して祓ひ
清むる家々に士農工商道々の神を祈ぬ
人迎はなきか中にも商人はその日〳〵ばい〳〵に
利運を蛭子の神祭り毎年正月十日の廿日は誓文
はらいとてみせに簾をおろし賣掛賣小うりの
値居場から客を招て振舞の座敷は銚子盃の
数も重る上戸達赤きは酒の戸隠山顔に紅葉ヲ
照しつゝ喜見城とは外ならしと断せぬたのし」一オ
み其ゆへ主かきてん菊の繪の銘々盆をなら
へたて下戸の御方江御馳走と饅頭ゆふかん（ママ）
みまさか餅もり並て引たりける是を見る
より下戸達は得手にほや〳〵出来だてのあたゝ
かまんちうこさんなれとおの〳〵集りせう
くわんす斯と見るより新川の酒大将釵菱（ケンヒシ）
伊丹之助諸白畳をけたてゝ立上り大きに
いかりて申様懸る目出度御座敷に罷出酒」一ウ
盛の最中なるに何とや餅めら推参な
酒宴をさます尾籠もの礼儀作法をし
らさるや酒を好て有事を揚てかそへて聞
すへし抑酒の初りは唐漢の高祖の
御代碩蘇と云る民のか作り初て日本へ傳ひ

菊酒しやふふ酒屠蘇白散の功能は是
百薬の長にして壽命を延るの良薬たり
されは尊き神国の神に御送り酒迚まいら
するまつた佛は甘露とて器量のたる味ひ
のさけを用る人々にやほが獨りもあらはこそ
皆吸筒をかたふけていとなみ〳〵と呑
時は老たる人も若やきつ若きはいつも老せ
さる神変ふしきのさけの妙しらさる下戸
の甘口な黄粉あつきのつらよこし餅つく杵
のかけしらのうんつくなりける餅くわし
めら我等とかたを並んとは身の白玉もち
すきのれつ座の下戸へのしらあてと
大きにのゝしり笑ひける爰に又江戸壱番
と聞ひある両国いく世大夫あん吉は此
よしを聞よりも急き座敷に馳来り生付
たる丸もちの目に角たてゝ申せしは
おこかましき生酔の舌も廻らぬくわう
けん哉抑餅の目出度事しらすは語り聞
すへし先正月の祝には尊き雲の上人
より下萬民に至る迄祝ひ寿く臓煮
餅扨七種のかゆ柱十五日には若もちを
月の初の杵の音ひなの節句のよも
きもち端午の橡かしわ餅頼母の節
會の新米餅都て玄猪川ひたり節き
のはての餅つきには栢たる木にも餅花
の盛を見せて世の中のめてたへ物ニ此うへは

」二オ

」二ウ

」三オ

」三ウ

あられかき餅水もちもみな春長の楽
と世の人々の賞くわんは年中行事障も
なし其上棟上かけの祝へ神事佛事の
中に住なからもちをさみするわる酒
めらいち〳〵樽のかゝみを貫汲拾
くれんとぬりける去ほとに酒の方ニは
よし(ママ)を聞ひて気はやのさけ捨けんさ
かなよせにして目にものをみれんなしの
餅めらに栗もちふかせてくれんすと
急き勢をあつめける先壱番には
参河の国の住人千代倉の土兵衛割利
駿河の国の住人富士野ゝ四郎煉酒
信濃国住人鬼ころしとふ六兵衛高遠を
はしめとして當国の軍勢ニは浅草
並木の住人隅田川樽右衛門縄巻門跡前の
住人三国一郎甘酒和泉丁ニ隠れなき
四方の赤法師瀧水つゝいて摂州
伊丹の一族満願寺の甘口法橋七ツ桜(梅カ)
あから之介呑よし素山の古酒郎吉なんと
軍と聞て生諸白みな一本気の面〳〵
なり扨名酒の方のものともには薩摩の
守泡盛味淋ちの保命坊桑酒あられ
之介梅酒各〳〵利酒の陶に張し箔
紙に己〳〵か生名ヲ書印て馳来る遥
におくれて地舞り悪酒郎苦酒新酒
登之介品醒志田見埃右衛門樽底なんと

」四オ

」四ウ

」五オ

都合其勢三千餘樽新川にと着到おし（致カ）
我先陳と出立しはあまり八丁吹風に
酒の匂ひもすさましきさて又もち
の味方ニは遠州新坂の住人蕨の粉次郎
高賣同国小夜の中山子育太郎飴吉駿州
阿部川之住人黄粉五文左衛門水取を先として
當国のつわものニは壺屋饅頭兵衛腰高
鳥飼和泉入道ゆふかん鈴木一郎加賀餅
續て目黒の粟守切餅日本橋之服太（ママ）
左衛門塩味浅艸に名高き大佛馬頭米吉
麹まち名代麩野焼介深川にしられたる
厂金弥太郎なんと凡其名を江戸中の
名物名代の餅しんこ数を限りもあらうち
團子米春たんこの類迄今度軍に寄
賃といふ異名も時の吉端（ママ）いさみ進
て打立しは餅花やかに見へたりけり
その外鶴見の米まんちう八丁堀の
お多福餅飯倉のお亀たんこといふ女
武者のめん〳〵は我蒸籠に陳を張り
敵達しと花ゆつらいひきふして待懸たり

水菓子干菓子餅方江加勢之事

懸る騒きを聞及ひ水菓子干菓子の面々は
いさ餅方江加勢せはやと思ひ〳〵の用意なす
先菓子勢の真先には名も高付に續菓子
の中にも勝て見事なるある平太貞盛（サタモリ）
吉原に隠れなき最中月毛のしゆん足

」五ウ

」六オ

」六ウ

に打またかりて懸寄けり續ひて車の
見せ看板のふれんの玉屋たま〳〵の
軍にすむ菓子武者は御蔵前に御存寄の
おこしの五郎丸云ねとしるしかふはしく
おのか風味を顕したり照降町にしられ
たる翁千兵衛くすまきは年も七十
都厂どふらん頭に積而うすやきのせん
へい仲間の外聞に老木に花のさきかけ
して高名手柄を顕さんと馳来る足も
軽命羅老の気情と頼母しき次は其名も
隠れなき浅艸誓願寺前の軽焼法眼等
是等を初白とり菊わん松かせ落厂
の袋詰の其中にも御せんの名を得し
さとふ栢の忠信猪の俣の金平糖た
るま糖た秀郷一斤唐菓子一族駄くわしの
めん〳〵駈あつまり甘ひもの、親玉勢
そのかす何千何百とも白木の桐箱入
のくわし笥子あるひは重詰袋つめ
おもひ〳〵の物くして水主河岸ヲ打立て
今川橋を通町十軒店の近邊は弥生の
雛市引替て一丁菓子市ともいつゝへし
さて又水菓子の先かけにはみかん太夫あつ
盛としも二八の花杏子揚桜皮の児鎧
に秋桃すりたる狩衣着て九寸五分
のよろひ返しさしも気なけな武者
ふりは中にも目立見ひたりけりりん

」七オ

」七ウ

」八オ

」八ウ

ごの三郎高則はばんふ武道の武者に
てて、打と名付たる丹波栗毛のあら
駒に青なし地の鞍おきて手綱かひ
くり乗しつめ敵にいかなるはかり事
有ても其手は桑の実と廣言はなちて
かけ寄たり續て甲斐源氏の一黨木
ざわし柿十郎渋なし樽抜右衛門督柿実
甘ほしつるしの丞皮むきざくろ山の
別堂（ママ）九年坊のきんかん僧都をはし
めとして秩父田舎の山里の畠山の
良黨（ママ）本田瓜治郎近常瓜割四郎た
ね捨真夏西瓜の守立うり何れも
むかふ水くわしの事を木の実や畠もの
あたり年の印迚鈴なりのことくおし
合へし合須田町せまく駈集る餅の
加勢を椎の実や何や栢のみいてふのみ
まても我おとらしとはつかうせり」九オ

生肴精進肴酒方江加勢并餅酒和睦之事

斯て酒方の加勢には生肴精進肴のもの
ともなり先壱番に越後海の住人蛸の
入道骨なし海老とふの皮具足に甲
貝を得（ママ）首に着なし二尺八寸のたち
の魚與（よ）こたべて能敵の首取貝との、
しりてそ掛寄たり上總の海の住人
おたきの鯛蔵ひれあれはいにしへの
武蔵ほふが七つ道具におとらしと」九ウ

すきくわかまの三つ道具勢たらおして
そ駈来る武蔵の海の住人士のどふの
金頭生貝の治郎青鮫續て平めの
武者所おこせの六弥太鱈（タラ）住相模の
海の住人鎌倉海老の権五郎はね」一〇ウ
まさふぐの長左衛門毒あり指身の治郎
かつ魚三浦黨にて鰆羅（サハラ）の十郎蜊野（アサリ）與市
熊野、海より駈下りし鱸（スヽキ）野三郎かれいの
六郎これらの者を先陳として後陳
には其名も高波の荒海ニ隠れなきほ
う〳〵の四郎高政か一族あじ原平三
はぜ時か手のもの生ぐさ勢いつれも
海にて育ぬれはいにしへの八嶋たんの
浦のことく船軍になれかしと夕浪風」一一オ
に押送り早も船は小田原町新端の河岸に
つくた嶋よりものさこもと、ましりてん
でにひち〳〵はね上り魚木に登る
勢ひにて我先懸んとあらそひしはす
さましかりける魚山なり相つ、ひて
精進肴の軍勢ニは先大将ニは源の大根
大江山の芋鬼神たいしに其名を
得し卜（ウラ）部七郎椎茸伊豆之国の山畠」一一ウ
にておもひたちたる坂田金平牛房
品川に隠れなきつけ焼少油干海士（ママ）
鎌倉河岸の名代豊嶋屋田楽法師
續て中山寺こんにやく僧都池野入道

蓮根茄子野與市鳴焼たで酢四郎
もみ瓜なんと我一ヵ先に物具して
懸る時せつを松茸の軍はけふか初
たけなから敵のやつはらこと〳〵く
打てしめじと夕顔やと瓜かほちやの
たくひまて馬かくらまのこんほふ程
な尾をふらせて乗出す神田土物
店のあり様は明神祭の練出しに
事ならさりし賑合なり去程に両
ぢんうんかのことく東西よりおし
寄る軍もときを蛭子構（ママ）大振舞を
駿河なる冨士を見はらす大店の
東みせには酒の味方西店は餅の味方
中店へたてゝ陳を取り酒方ニて
ほら具（ママ）を吹立れは餅方ニてはとら焼
をたゝき立敵も味方も一時にときを
どつとぞ作りしは傳ひたる其むかし
川中嶋をへたてたる甲斐と越後の
陳取も斯やとおもひしられたり爰
に食物の惣大将本膳飯の守服（ママ）吉は
御臺所町の側なる我食樋のしやうくわく
に手勢ヲ揃ひて居られしか餅酒すてに
軍と聞よりもいさやわほくを取詰んと
其日の献立二汁五菜の手勢引具し
押つめしにそふ方今やと見へける
ゆへ真中へ發向し高らかに申されしは

」一二オ

」一二ウ

」一三オ

いかに方〳〵聞たまひ餅さけ飯と
かわれとも元来は米ならすや其同姓
のもちとさけ友喰の合戦とは誠に
まつ代迄のかきんなり益なきあら
そひせんよりも双方和睦しかるへしと
事を訳たるちうしやくにもち酒
実もといかりをしつめたかひに陳を
引汐の日も暮掛に蛭子構これより賣
買はしまりとおの〳〵一度に座をつ
くり十千万両と手を打て祝ふ嘉
例の誓もんはらひ日〳〵にます
〳〵商なひのつきせぬ家こそ
めてたけれ

」一三ウ

」一四オ

」一四ウ

【付記】貴重な資料の翻刻をご許可下さった徳田和夫氏にお礼申し上げます。

（本学非常勤講師）